ビワマス資源の現状

田中秀具

◆背景・目的

ビワマスの増殖・放流方法の検討の一環として、最近漁獲が不振といわれるビワマス資源の現状について推測を行った。

◆成果の内容・特徴

2003年、2004年の回帰親魚の平均体長は、過去と比較して大きかった。親魚調査で得た標識再捕魚(2003年は2+、2004年は3+)の体長組成から、それは各年級に大型個体が多いことで各年級の平均値が大きい方へずれ、それが重なって、親魚全体群の平均体長を大きくしていると推測された。

・回帰親魚は、夏の漁獲強度が小さければ、大型サイズも取り残されることになる。さらに、産卵親魚の多寡(採卵作業の進み方)は、その年の資源量を反映するという考え方で、過去にさかのぼってデータ解析を試みた。漁獲量と単位採卵数当り所要日数との関係として解析すると、下図のようになり、近年のビワマス漁獲の不振は資源量の減少によるのではなく、漁獲強度の低下によるのではないかと推察された。

◆成果の活用・留意点

・ビワマス資源量、漁獲強度に関しては直接推定ではなく、傍証であり、今後の検証が必要である。

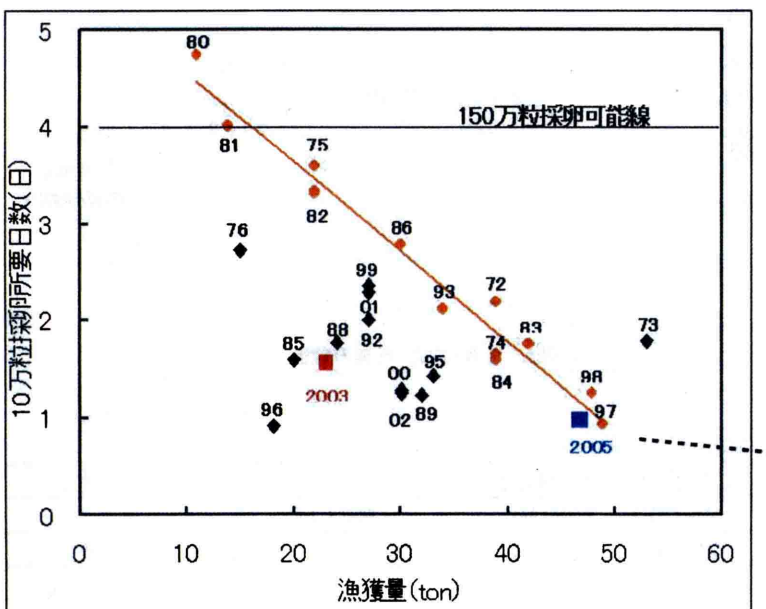

図 . 漁獲量と10万粒採卵に要した日数の関係

＊)図中の2桁の数字は西暦年の下2桁を表す(72～99は1900年代、00～02は2000年代)。

2005年秋の採卵状況から見れば、漁獲不振といわれた2005年ではあるが50トン近く獲れたはず。

◎上図から、採卵状況の割りに漁獲量が少ない年は、1976, 1985, 1988, 1989, 1992, 1995, 1996, 1999, 2000, 2001, 2002, 2003, 2005*)であると推察された。

＊)2005は漁獲量がまだ出ていない。また、2004年は台風の影響により除外した。